

# YNAC通信

2022.08.01 No.39

屋久島灯台

2021年6月24日国指定有形文化財に指定

## 世界遺産 30周年を迎えるにあたり

松本 毅

YNAC は今年で 29 周年を迎えることができました。また、来年は、YNAC30 周年であると同時に世界遺産 30 周年でもあります。

屋久島環境文化財団が 30 周年に向けて「屋久島 知の巨人たち」という冊子を発行いたしました。「屋久島環境文化懇談会」の委員から 10 名の方と屋久島に関わる有識者 4 名から当時の思いを寄稿された 1000 字メッセージをまとめたものです。

屋久島環境文化財団は、1990 年鹿児島県が鹿児島県総合基本計画の 14 の戦略プロジェクトに「屋久島観光文化村構想」を挙げたことに始まります。マスタープランの作成に 3 つの委員会が設置されました。その一つ「屋久島環境文化懇談会」の委員には国内のトップクラスの有識者が名を連ねていました。まだ屋久島に移住して間もない私も 1991 年 6 月に行われた懇談会に傍聴に行きました。離島開発総合センターは満員で、私は一番後ろで立ち見をしたのを今でもはっきりと覚えています。

この冊子を読んでも「屋久島を世界遺産に」と言い出したの

は当時（財）国立公園協会理事長だった大井道夫氏だったそうです。まだ日本は、世界遺産条約に批准していない時期であり、国を動かしての世界遺産条約締結と屋久島の登録へという長い道のりでしたが、なんと 3 年後の 1993 年 12 月に屋久島は世界遺産に登録されました。また、大井氏は、「エコツーリズムの実践」とも謳っており、屋久島の運命を変えた「歴史的発言」だったと当時鹿児島県事務責任者であった小野寺さんは振り返っています。

マスタープランに掲げられた戦略の一つの「新たな地域産業の創出」の中で「エコツアーの基盤整備」が謳われていました。YNAC 設立の準備をしていた私どもの下に鹿児島県からどっさりエコツアーの資料が送られてきて、屋久島のエコツアーのモデルコースを作りたいと依頼がありました。その資料を読んでも我々がやろうとしていることは、まさに「エコツアー」ではないかということで、屋久島で初めて「エコツアー」と銘打って YNAC を立ち上げることとなったのです。

あれから 30 年、屋久島は林業の島から世界遺産の島へと大きく変わり、我々が始めたエコツアーガイドという仕事も屋久島町の町条例で公認されるなど大きく環境が変わってきました。

世界遺産前の屋久島から今日まで、激動の 30 年をつぶさに見つめてくれたことは、私にとってとても幸せなことだったと思いながら「屋久島 知の巨人たち」を読ませていただきました。

## ヤクダヌキ化する狸?!

市川 聡

屋久島にはタヌキはいなかったとされていますが、30年ほど前から野生のタヌキが目撃されるようになり、現在では西部の世界遺産エリアや白谷雲水峡でもタヌキのため糞を見るようになりました。かなりの領域でタヌキが野生化しているものと考えられます。

タヌキと言えば、ネットでフリーのイラストを探すと、こんなふう目の周りが黒っぽくなるイメージがあります。



実際に京都市山科に生息する野生のタヌキは、こんな顔をしています。



鹿児島県の外来種リストによると、屋久島のタヌキは、県内由来外来種に指定されています。つまり鹿児島県内のどこかで捕獲されたタヌキが屋久島に導入されたということです。

ネットで鹿児島本土のタヌキの写真を見ても、京都のものときほど変わらない印象でした。

最近では、屋久島でも野生のタヌキが観察しやすくなって、写真も撮れるようになりました。するとどうでしょうか。屋久島のタヌキの顔つきが、本土のもの少し変わってきたように見えます。

これは 2022 年 5 月 25 日に春牧の市川家の庭



に、ヤマグワの実を拾いに来た時の写真です。なんとなく顔が白いような気がしませんか？

そう思って調べてみると、2021 年 11 月 27 日に撮影した、西部半山のタヌキの顔も白かったです。



春牧と半山というと、ちょうど屋久島の山をはさんで東西正反対の位置になります。これだけ離れたところで似たような毛色をしているということは、移入されたタヌキが、屋久島の環境に適応して、独自のヤクダヌキへの道を歩みだしたと、言えるのでしょうか？

ちなみに昔のタヌキは、どうだったのでしょうか？



1999 年 11 月 19 日に平野のサル川ガジュマル近くの県道で車に轢かれて死亡した個体の写真を見ると、まだ顔が黒かったような気がします。

体色の変異については、グロージャーの法則というものがあります。これは哺乳類や鳥類などの恒温動物は、寒冷・乾燥した地域に棲む個体ほどメラニン色素が少なく明るい色となり、一方温暖・湿潤な地域に棲む個体は、メラニン色素が多くなり暗い色となるというものです。

実際にニホンザルでは、このような地理的クラインが見られ、寒冷地のサルほど明るい色をしていて、南の島のヤクシマザルは、ニホンザルの中では最も暗い色をしているといわれています（濱田ら 1992）。

しかしヤクダヌキの顔はむしろ明るくなっているので、この法則には当てはまりそうにありません。

これとは別に体色の地域変異には大きく分けて 2 種類の要因が考えられています。

一つは外敵から目立たないようにする保護色です。屋久島では、タヌキの天敵と言えば人間ぐらいで、ワナで捕獲されると、体色はあまり関係がなさそうです。

もう一つは、社会的な色彩です。マンドリルの派手な顔色やゴリラのシルバーバックなどは、雄の力を示す色と考えられています。

そう調べてみると、屋久島は常緑樹の暗い森に覆われた島です。その中でヤクダヌキ君の顔を見ると、ぱっと明るく目立つような気がします。

ヤクシカの茶色い毛皮は、森の中に堆積する枯葉に溶け込む保護色と考えられますが、唯一お尻が白く目立ちます。シカの仲間ほどどちらかと言えば食べられ側の動物で、森の中での保護色は重要なので、どの種も茶色っぽい色をしています。これで同じ仲間を見分けて、恋に落ちると考えられます。その証拠に、生まれたばかりの赤ちゃんは、恋をするにはまだ早いで、お尻の毛も茶色かったりします。

そうするとヤクダヌキ君も暗い森の中で、仲間にあピ

ールするために顔が白くなってきたとしたら、屋久島の暗い森への環境適応ということになります。

そもそもタヌキの顔の下半分が黒っぽく見えるのはなぜでしょうか？京都のタヌキを見てもらうと、日のあたる背中が明るくて、腹側が暗くなります。この時、顔の半分から下が黒いと、影となり、顔があまり目立たなくなります。顔が目立たなければ、ただのブッシュのように見え、空を飛ぶ鷲やオオカミなどに発見しづらい保護色になっているのではないのでしょうか？

そうすると天敵のいない島に導入されて、仲間が少ない状況で分散したヤクダヌキにとっては、保護色よりも、仲間を見つけやすい明るい顔に進化してきたという可能性が考えられます。

このまま屋久島のタヌキが屋久島の環境に適応して、ヤクダヌキ化していくと面白いと思ってしまうのですが、前出のように鹿児島県では外来種として駆除の対象となっています。

外来種の問題の一つは、在来種の生活を圧迫することにあります。タヌキのため糞を見ていると、彼らが半山で食べている木の実、マメガキ（超渋柿）やセンダン（有毒）など、強力な先住者であるサルやシカが食べないものが主流です。どちらかと言えば屋久島では最下層のカーストに甘んじているのが、野生のタヌキです。種子島には大正時代までタヌキがいたということですから、再移入と違って優しく見守ってはどうでしょうか？

### 参考文献

濱田穰ら（1992）マカク、特にニホンザル（*Macaca fuscata*）の体色変異について、霊長類研究8、1-23



## 『祝福』という言葉の葉

松本 淳子

コロナウィルスが世界中にパニック状態を引き起こし、人や物の移動が制限を余儀なくされ先の見えない不安の中に在った時、なぜかわたしは『祝福』という言葉を受け取ったということ、前々回の YNAC 通信に書いた。

『祝福』という言葉はキリスト教でよく使われる言葉のようであるが、なぜその言葉がわたしに来たのか、この二年間は『祝福』の意味とその内容を考え続けた日々であった。

いま手元に「新井白石とヨワン・シローテ」という大正十三年に発行された古い本がある。

二十年程前、帰省したおりのことであった。隣町の古川というところで「吉野作造記念館」なるものをたまたまみつけ初めて入ってみた。吉野作造という名前に聞き覚えはあったが、大正デモクラシーの理論的支柱だった「民本主義」を提唱した法学者がまさか隣町出身の人だったとは恥ずかしながら知らなかった。

そして重ねてたまたまのことであるが、その展示会場を出たところに著作物が並んだ本棚があり、そのうちの一冊を引き出してパラパラとめくっていたら「九州の南端大隅國馭護郡の海上に屋久島といふがある。種子島のそのまた西南にあたる小さな離れ島だ。此處に阿波の國から年々漁夫が出稼に来る。併し之は今の話ではない。約二百年も前の昔のことを云はうとしてあるのである。……云々」とヨワン・シローテがひとり屋久島の地に上陸した時のことが書いてあった。

まさか東北地方の小さな町で「寛永五年(西暦一七〇八年)の屋久島」の記述に出会うとは夢にも思わなかった。しかしその驚きは日ごとに薄れ、改めて「そういえば」と思い出したのがコロナ禍の三年目にあたる今年だった。

「新井白石とヨワン・シローテ」は徳川六代将軍家宣の侍講を務めた朱子学者の新井白石が書いた『西洋紀聞』を基にして、開国後自らもプロテスタントの信者になった吉野作造が著したものである。そしてヨワン・シローテは鎖国時代に屋久島に上陸、日本に潜入を試みたカトリック教会の宣教師ヨハン・バティスタ・シドッティのことで、『密航 最後の伴天連 シドッティ』(古居智子著)に詳しい。

新井白石の教養・向学心については多くの研究がなされており、シドッティについても「神の御業」を探求することから生まれた自然哲学・自然科学を含めた学問への造詣の深さが検証されており、その二人が出会ったことから「西洋紀聞」「采覧異言」が

書かれた。

「采覧異言」は日本最初の組織的世界地理書である。

「西洋紀聞」は諸外国の歴史・地理・風俗に加えキリスト教に対する白石の批判などが記されている。

その批判とは「ここに知りぬ、彼方の學のごときは、ただその形と器に精しきことを。所謂形而下なるものゝみを知りて形而上なるものはいまだあづかり聞かず」と、儒教の中でも特に合理性を求める朱子学の世界観では、西洋の学問や技術の優秀さは認めるが、神の話をするシローテはまるで別の人間のものであるとも書いている。

そして吉野作造はこのあたりのことを「是れ白石の責ではなくして、當時の神学の幼稚なるの結果に外ならない。當時の天主教會が神の道を傳へんと熱心に働いて、かくまでの危険を冒して東洋傳道に努めたのは敬服に堪へないが、東洋には既に如何なる哲学があり如何なる宇宙観があるかを先づ究めなかつたのは、儘に教法弘通に失敗した一つの原因だと思ふ」と述べている。

「西洋紀聞」は鎖国下のため公にされず、秘かに写本によって伝えられたが、幕末になってはじめて広く流布されるようになり、當時の世界認識に大いに役立った。

「和魂漢才」から「和魂洋才」へのシフトが始まった時期である。ただしこの時の和魂の中には道教や仏教、そして儒教のエッセンスが当然ながら統合されていた。

そして吉野作造においては和魂にプロテスタンティズムの要素が加わった。彼が唱えた「民本主義」とは「手段の民主性を求める民主主義とは違って結果の民主性を求めるものである」とし、天皇君主制を認めつつも「神の意志に添う」という信仰を持ち続け社会改革に生きた。

ヨワン・シローテは結局布教を許されることなく、幽閉された江戸小日向の切支丹屋敷で祈りの日々をおくり、世話をする下人夫婦に洗礼を受けた咎で夫婦と共に地下牢で誅された。

この国において昨今特に激しさを増した為政者たちの強欲や嘘や誤魔化しを見るにつけ、キリスト教的世界観(原罪)をベースにして生まれた「民主主義」や「立憲主義」というシステムも、天の理を知り身を律し経世済民に働いた儒学者新井白石の「和魂」もまるで価値などないもののように扱われているように感じる。

神でも仏でも天でも良いけれど人知を超えた大いなる存在に対する畏れを忘れてしまったら、人間も社会も壊れてしまうのだろう。

このコロナ禍の状況の中で『祝福』という言葉を受け取り、その意味を儒教や仏教やキリスト教を学びながら考え続けてきたが、ある日ふと気がついた。

いまここにコトバと共にあること、それこそが『祝福』であると。

## 屋久島太鼓について

松本 毅

東京大田区大森北に住んでいた頃、近所の浅間神社で6月に行われる例大祭は大変賑わいがあるお祭りでした。

ひと月程前からあちこちから聞こえてくる、笛や太鼓を練習する音を聞きながら、東京の下町の祭りに自分も参加したいと思いましたが、なかなかその機会がありませんでした。

そんな思いがあり、屋久島に移住した翌年1988年1月、「上屋久町には、屋久島太鼓というのがあるよ」と聞き、早速リーダーの鮫島さんを訪ねてみました。

鮫島さんに挨拶に行ったら、毎週金曜日に屋久島離島開発総合センターで練習をしているから一度見においでと言われ、早速練習を見に行くことになりました。

ところがその日、見学だけのつもりだったのが、行くとすぐに太い檜の木のバチを渡され、こう叩んだよと教えられ、初めて和太鼓というものを叩いてから35年後の今日まで、太鼓を叩き続けています。

『屋久島太鼓保存会』は1977年5月旧上屋久町内の有志によって太鼓同好会として発足し、町の補助金と寄付金により大太鼓1台、中太鼓2台、小太鼓2台を購入して活動を開始し、その練習成果を各種イベント、町の文化祭等で披露するところから始まりました。

そして1984年4月、町が進める林地活用計画と並行し、屋久島にふさわしい祭りの創造と太鼓のオリジナル曲のシナリオを創るための検討会を、町企画課、町商工会、屋久島太鼓保存会で立ち上げました。翌年5月には祭りの名称を「ご神山まつり」、太鼓の名称を「益救神太鼓」と決定しました。



2010年12月31日 益救神社 益救神太鼓

その年の12月31日益救神社境内の特設舞台上、厄払いの太鼓として「益救神太鼓」を本格的に披露しました。

「益救神太鼓」とは、「トイのバン（大晦日のこと）」に神々たちが山から「神之川」（宮之浦川の支流）伝いに降りてきて、そのうちの「トイのカンサー（歳の神様）」と呼ばれる神様が村の家々を回り、子供たちに歳を与える祝い餅を配ります。そして太鼓を打ち鳴らしながら益救神社に集結した「善の神」と「悪の神」が壮絶な太鼓の叩き合いの末、「悪の神」が退散し村人の一年の厄を払うという、屋久島に古くから伝わる逸話を基にした和太鼓の壮大なイベントです。

1977年に楠川の「屋久島大社」が創建されてから、益救神社への初詣参拝者が減少してきていたのですが、大晦日の晩に「益救神太鼓」の奉納をするようになってからは徐々に益救神社への参拝者が戻ってきました。近年では、この奉納「益救神太鼓」を見るために年末年始に屋久島に来られる方もいるほどです。

1977年から活動を開始した『屋久島太鼓保存会』でしたが、当初メンバーに脱退があり弱体化していく中で、1987年商工会青年部から新メンバー数名が加入したちょうどそのタイミングで私も入会することになりました。

入会してからしばらくは、ロールという30分間ひたすら太鼓を打ち続ける基礎練習で体を作ります。毎週毎週ロールばかりを数ヶ月続けたある日、口永良部島に遠征に行くことが決まったからと「益救神太鼓」のメンバーとして曲の練習が始まりました。そして、1988年7月口永良部遠征で初舞台を踏むことになりました。口永良部島の人々が、子供からお年寄りまで太鼓を運んだり、村を挙げての盛大な歓迎会を開いて下さったり、大変感激をしたのを覚えています。

この時組んだメンバーが最強のフォーメーションで、その後全国の数々のイベント、祭り、記念式典などで北海道から沖縄まで遠征することになります。

その中で、忘れられない遠征があります。沖縄宜野湾の沖縄コンベンションセンターで行われたお祭りに出演した際、公演が終わった夜に屋久島太鼓のトラックのフロントガラスが割られるという事件が起きました。察するに、「益救神太鼓」には、神道のお払いがあるのですが、それが国家神道や天皇制を惹起させた可能性もあります。企画運営が東京の業者であったため、戦中戦後の沖縄、薩摩と琉球の歴史などセンシティブなところまでの配慮ができなかったからでしょうか。ちょっと考えさせられる出来事でした。

現在、8月の第1週土・日に宮之浦港火の神山ふ頭で行われる「ご神山まつり」では、ご神山禊の神事では「水響」、ご神火興し神事では「火の神」という曲に合わせて各神事が執り行われます。会場には「屋久杉の大太鼓・神鼓（しんこ）」が設置され、太鼓の響きと共に祭りが始まります。



水響 前編



水響 後編

この「屋久杉の大太鼓・神鼓」は、重さ約1トン、一本の屋久杉をくり抜き作られた大太鼓です。

1986年11月屋久杉大太鼓製作実行委員会が発足し、町の予算と多くの寄付を集め、翌年1月屋久杉の原木を石川県浅野太鼓店に送り発注、1990年9月屋久杉大太鼓が完成し屋久島に到着、その年の大晦日には益救神社で屋久杉太鼓奉納行事が行われました。

翌1991年3月やくすぎマラソン前夜祭で屋久杉大太鼓が島民に披露されました。

この大太鼓が青森の浪岡町で披露されたことがあります。浪岡町とは、交換留学生を通じて交流があり、夏祭りに招待されたのでした。これが初めて「屋久杉の大太鼓・神鼓」が島外で披露された時でした。



2022年8月6日 ご神山祭り

祭りでは、4トントラックに載せた太鼓を打ち鳴らしながら浪岡町内をパレードしました。その翌年は、「ご神山祭り」に浪岡町から「ねぶた」を携えてたくさんの方々が来てくださり、みんなでハネトとなり、踊り明かしました。その後も屋久島から2回行き、浪岡町から2回来ていただき未だに交流を深めています。



2011年9月18日 青森 浪岡町

もう一つ、私にとって忘れられない公演があります。それは1994年7月26日に信州まつもと空港の滑走路が延長され、ジェット機が就航、新しい旅客ターミナルビルのオープン記念イベントでの公演です。

主催者から急遽イベントの前に触れ太鼓を一曲やって欲しいとの依頼がありました。ちょうど作曲途中だった「トロッコ囉」という曲の編成を組み直し、短縮バージョンで披露をしました。この時は、メンバーの気力が最も充実していた時期で、息がぴったりと合い、気合と迫力の「トロッコ囉」となりました。

いつもよく島外遠征で一緒になる種子島の鉄砲隊の方々が演奏が終わったら駆け寄ってきて、「お前らすごいなあ！」と絶賛してくれました。自信に満ち溢れた公演でした。

太鼓を始めた頃は、太鼓はリズムを「叩く」ものと思っていましたが、この時に太鼓は魂を込めて「打つ」ものだと理解したのでした。

30代だった私も35年の時を経て、60代になるとさすがに悔しいけれど当時のような体力はなくなりました。今は、締め太鼓・当り鉦・チャッパなどのわき役に徹しています。しかしまたこのわき役も奥深く、極める喜びを感じつつ、未だ現役で頑張っています。

「益救神太鼓」や「ご神山祭り」は、歴史的にはまだ40年ほどですが、100年続けば立派な郷土芸能と言えるでしょう。これからも途絶えることなく続くことを願っています。

## 屋久島の鳥ごよみ ～観察記録からわかってきたこと

福留 千穂

### ちりも積もれば山となり

継続的に続けているとりさんぼの記録を、昨年度の通信で一覧表にして載せようとしたが、思っていた以上に種類がたくさんあり、うまくまとめることができず先延ばしにしていた。

今回は、記録をつけ始めた2020年7月から2022年6月までの2年間分のデータをまとめることにした。

### 1年中見られる鳥

一覧にしてみると、留鳥と言われる鳥たちは、当たり前だがずっと記録がある。私がとりさんぼをするのが主に集落からその周辺の森にかけてなので、ヒヨドリ、ホオジロ、メジロ、セッカ、ウグイス、ヤマガラ、コゲラ、トビ、ハシブトガラス、そして3バトリオのキジバト、カラスバト、ズアカカオバトは年間通して確認できている。

ただ、やはり自分の生活圏にどうしても偏ってしまい、海岸、大きい川の河口の把握があまりできていない。そして、高標高に生息する鳥の把握も、ツアーの時に見聞きできたものが中心となるので記録が乏しい。そういうのも一覧にしてみると、あらわになってくる。

まだまだデータは不十分ではあるけれど、身近にいる鳥として、鳥ごよみとしてまとめてみることにした。(後半見開き2ページ)

まず、「屋久島の野鳥ガイド」(令和元年9月改訂版)の屋久島の野鳥目録を参考に、留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥と分けて、実際にどの鳥がどの時期に確認できたのかを記してみた。

留鳥で毎月確認できたものは、省略して留鳥の行の下の欄に種類だけ記載した。

留鳥以外で複数回確認できたものは長い横棒で、1回しか確認できなかったものは四角■で区別した。

### 鳥ごよみにしてみてもわかること

留鳥は年中見られるとなっているので、どの時期も確認されるはずだが、それぞれの鳥は生息域が異なっているので、それらを全部自分一人で確認するのは難しく、抜けて

いる部分が多い。また、中川氏がまとめた「屋久島並周辺海域の鳥」(1994)によると当時スズメはいないのではないかと思われるくらい少なかったようだが、今では通年見られ変化していることがわかる。

夏鳥は種類が少ない。その中でアオバズクの鳴き声を最初に確認できている。ただ、永田では冬も鳴き声が聞こえ、夏になると盛んに聞こえるそうなので、もしかすると年中いるのかもしれない。

次いで4月に確認できるリュウキュウキビタキは11月下旬までいるようだ。最も長く滞在している。

ホトトギスは8月までしか確認できていない。特徴的なさえずりがそれ以降聞こえないだけで実はまだ滞在しているのだろうか。

目録で冬鳥となっているものにカモ類ではオンドリがある。オンドリはずっといるというよりはたまに見られるような認識だ。むしろ、目録では旅鳥となっているカルガモやマガモの方が冬鳥の印象がある。



マガモの群れ 2018.1.24 安房川

タカやハヤブサの仲間は冬鳥として渡ってくるものが多い。チョウゲンボウやノスリを見つくと、冬鳥のシーズンが始まったという印象がある。ハイタカやツミなどの小型のタカはなかなか見るのが難しいがこれらも冬鳥で夏は見ない。

9月下旬に、冬鳥のモズやハクセキレイも確認できている。ハクセキレイは、冬鳥の中でも春先まで長く滞在しているのでよく目にする。同時期まで見られる冬鳥は、シロハラ、ビンズイ、アオジが見られる。

シロハラとそっくりなアカハラも冬鳥として目録にあるが、屋久島では冬の間ずっと見られるわけではない。冬になる前と春先に見られる程度なので、冬鳥よりは旅鳥と考えられているのではないと思う。

目録でシギやチドリの仲間には旅鳥が多い。干潟などで採餌行動をとる鳥たちにとっては、屋久島の河口はそうい

う広い遠浅の泥地帯が少なく、一定期間ずっと滞在するのは不向きなのだろうか。たまに見ることがあるがずっといる鳥は多くないと感じる。そんな中でも、この夏コチドリの親子がいると聞いた。図鑑では九州以北では夏鳥とあり、もしかすると繁殖のために北上していたうちの少数が屋久島にとどまって繁殖したのかもしれない。



2羽のコチドリ。左は頭の黒帯が薄いので幼鳥と思われる。親子だろうか？  
2022.7.2 春田海岸

ツバメ類では、ツバメが長い期間確認できている。昔は通過していくだけで、屋久島では繁殖は確認されていなかったようだが、現在安房で営巣も確認されるので夏鳥として滞在しているのもいると思われる。もしかしたら越冬しているのもいるかもしれない。ツバメの群れに混じってコシアカツバメやアカハラツバメ、イワツバメも時々見られる。2～3月に島の南部ではリュウキュウツバメが見られた。今年の7月にもリュウキュウツバメの親子と思われるグループも見られたので、おそらく営巣して繁殖していると思われる。冬の間もずっといる留鳥なのか、島の南部まで足を運んで歩いてみたい。



リュウキュウツバメの成鳥(左、真ん中)と巣立ち雛(右) 2022.7.6 中間

旅鳥の中に、ジョウビタキとルリビタキが入っているが、記録を見ると、ジョウビタキが10月から、ルリビタキはリュウキュウビタキと入れ替わるように11月から、4月頃までずっと見られる。冬鳥として考えていいのではないと思う。

### 幻の鳥

「屋久町郷土誌第4巻 自然・歴史・民俗」の鳥類の項を見ると、そこには留鳥としてアカヒゲが載っている。残念なことに「種子島、屋久島は乱獲によって絶滅したと報じられている」とある。しかしここ最近では目撃例もいくつかあ

り、いつか出会えると信じてきた。そしてやっと、昨年5月にははっきりとしたさえずりを、8・9月には幼鳥の姿を確認できた。



アカヒゲ幼鳥 2021.8.28 小瀬田 アカヒゲ若オス 2021.9.8 楠川

このことは、日本野鳥の会の野外鳥類論文集 Strix にこれまでの観察事例と合わせて論文にまとめていただき掲載された。それによると、屋久島で確認されるアカヒゲは8～9月が多く、またそれらは幼鳥で繁殖期の5～6月の確認が少ない。5月のさえずりが確認されるものも、渡りの途中のもの可能性が高い。男女群島やトカラ列島の中の島で繁殖が確認されているのでそこから渡って来たと考えられる。

今年はさえずりを確認できなかったが、また夏の終わりに姿が見られるかもしれないと楽しみにしている。

また、昨年アカコッコらしき鳥を花之江河付近で見た。茂みの奥にいたのははっきりと姿をとらえることができなかった。いつの日かしっかり記録を残したい。

### 今後のとりさんぼ

まとめてみるとわかってきたこともあるが、気になることがたくさん出てきた。水辺の鳥も観察したいし、島の南部のツバメも気になる。冬に確認できたヤクシギランドのマヒワは冬の間中いるのかも気になる。あっちこっち観察したいのだけど体は一つしかない。普段は近所を、時間がとれそうなきは遠くを、と場所を選択して継続的に見ていきたい。

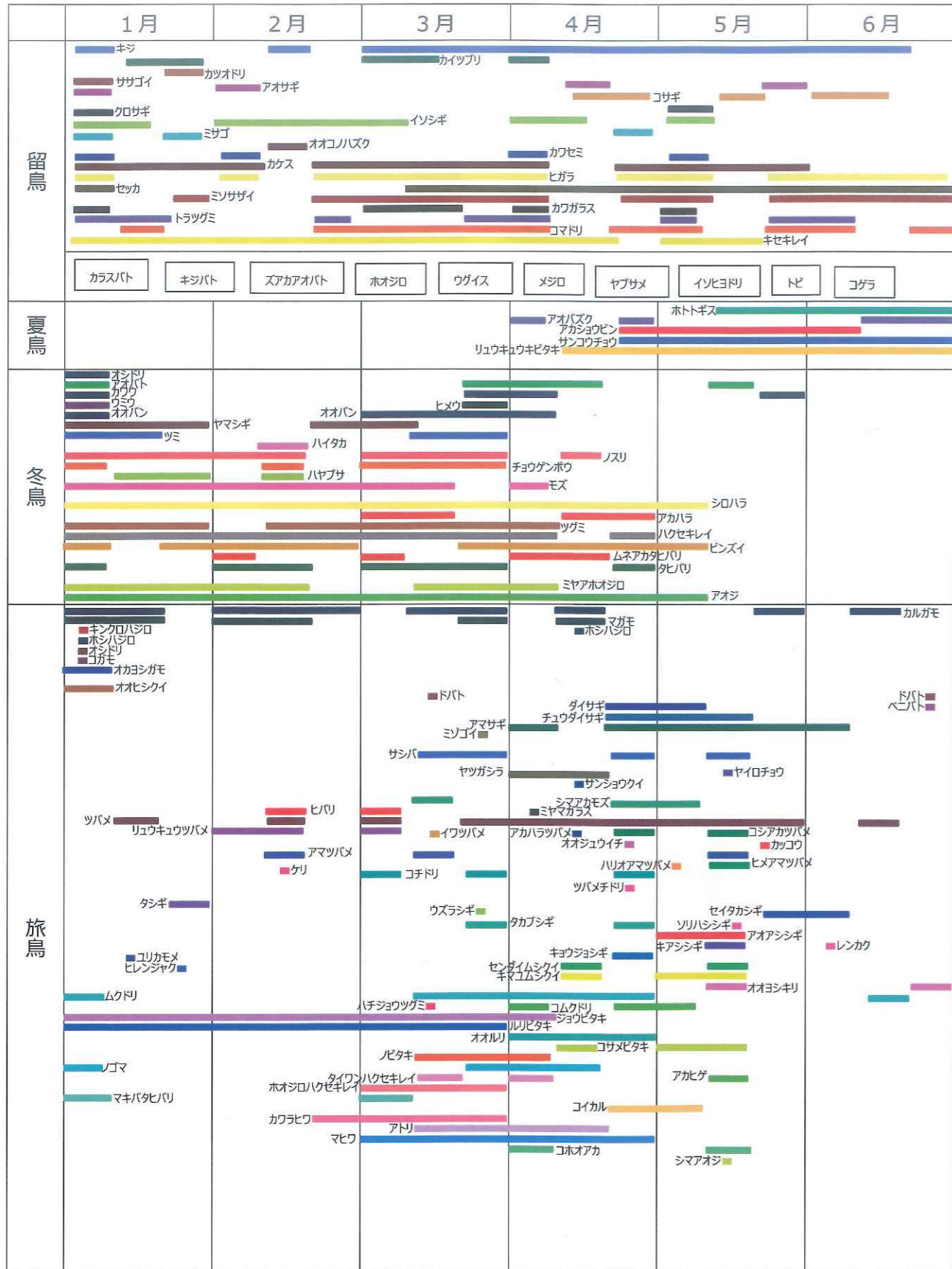
でも1番のモットーは、気負いせずに楽しむ。

これからも聞こえてくる声に耳を傾け、鳥たちの行動の観察を続けていきたい。

### 参考文献

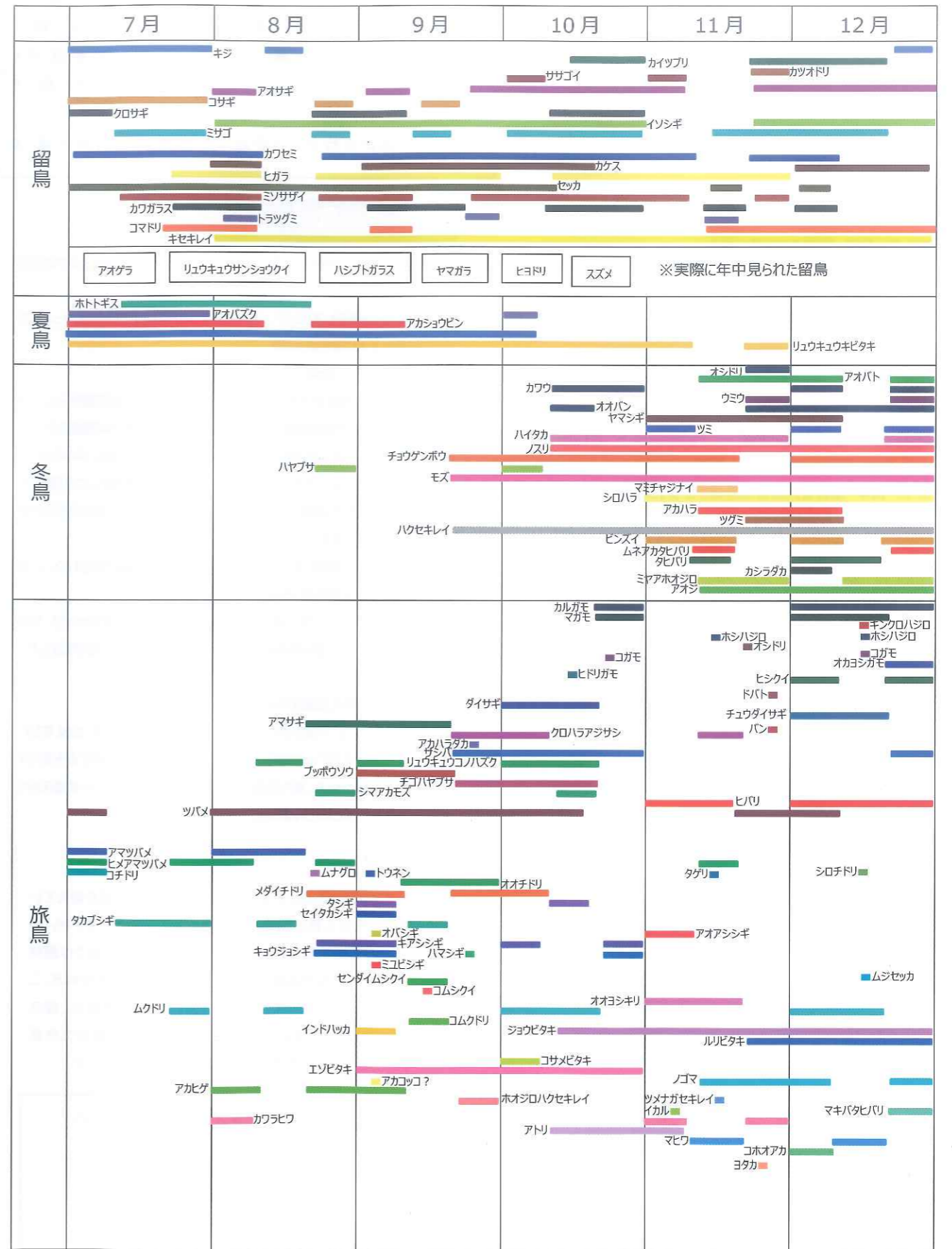
屋久島の野鳥ガイド 屋久島環境文化財団(2018)  
屋久島並周辺海域の鳥 中川暁之介(1994)  
Strix vol.38「屋久島でアカヒゲは繁殖しているのか-8・9月の記録が語るもの-」福留・尾上・上田(2022)

屋久島で見られる野鳥カレンダー



※確認できた時期を記してあります。

屋久島で見られる野鳥カレンダー



※確認できた時期を記してあります。

## Calendar・2021-22

2021

- 7/1 市川 熊毛郡文化財保護審議会研修会に参加  
7/4 松本 伊勢志摩 エコツアーガイド登録制度 検討会  
7/23-8/8 東京 2020 オリンピック開催  
7/27-29 霧多布高校研修旅行受入  
8/1 市川 横峯遺跡竪穴住居建替え作業完了  
8/29-9/2 岡山理科大学エコツーリズム技法コロナ禍で中止  
9/7 松本 新宿御苑エコツアー検討会  
9/15 郁文館高校 SSH 実習コロナ禍で中止  
9/25,26 松本 和塾エコツアー受入  
10/5-8 鳥取東高校研修旅行コロナ禍で中止  
10/6-8 昭和女子大付属中学研修旅行コロナ禍で中止  
10/19 松本 日本観光振興協会モニターツアー実施  
10/25-27 鹿児島県立甲南高校 2年生 SSH 実習受入  
10/27,28 松本 大樋町アドバイザー派遣  
10/30 ダイナミック地質ツアー(西鉄旅行)受入  
10/31 小原 鹿児島大学実習  
11/9 松本 平尾台アドバイザー派遣  
11/10 松本 環境省人材育成事業オンライン講義  
11/15,16 市立千葉高校 SSH 実習受入  
11/17 松本 環境省人材育成事業オンライン講義  
11/25-28 風の旅行社プラタモツアー受入  
12/1 市川 世界遺産商談会ネット参加  
12/6,7 松本 伊勢志摩 エコツアーガイド登録制度 検討会  
12/8-10 鹿児島県立甲南高校 1年生 SSH 実習受入  
12/13-15 香川県立三本松高校 SSH 実習受入  
12/17-19 JR 東日本ゆとりの大人旅受入
- 2022
- 1/9 市川 MBC テレビ「新窓を開けて九州」に出演。横峯遺跡の竪穴住居復元作業について  
1/15,16 松本 JMGA 更新講習受講  
1/17-19 松本 対馬講演  
1/17-19 小原 NHK 取材協力  
1/20 松本 三本松高校研修発表会リモート講師  
1/20 松本 平尾台アドバイザー会議リモート参加  
2/25 松本 西表島ガイド資格審査会  
3/8-10 松本 奄美群島エコツアーガイド講習会講師  
3/11 京都大学大学院ランド線 YOM 実習受入  
3/29-31 昭和女子大付属中学研修旅行受入  
4/20-22 フォレストニア社員旅行受入  
5/9 松本 平尾台アドバイザー派遣  
5/17-18 キャラバンサライ受入  
6/1 郁文館高校 SSH 実習受入  
6/6 松本・市川 普通救命救急講習会受講  
7/11 市川 文化財保護審熊毛研修で横峯遺跡解説  
7/21-23 四万十高校研修生にコロナでキャンセル  
7/26-28 松本 大分県屋久島視察受入  
7/26-28 霧多布高校研修旅行受入

## Contents

巻頭言 世界遺産30周年を迎えるにあたり	松本 毅 1
ヤクダヌキ化する狸!!	市川 聡 2
『祝福』という言葉の葉	松本 淳子 4
屋久島太鼓について	松本 毅 6
屋久島の鳥ごよみ	
～観察記録からわかってきたこと	福留 千穂 8

## 執筆・取材記事

なぜ、今「ガイド」なのか? ヒアリングレポート / 公益社団法人日本観光振興協会

ガイド事業者戦地事例ヒアリングレポートでYNAC松本毅と自然のポケット代表 会田享一氏と2人に聞き取り調査。

観光文化 ガイドという仕事 / 公益社団法人日本交通公社

特集1 座談会1で知床ネイチャーオフィス代表松田光輝氏・海東遊民くらぶ代表 江崎貴久氏 YNAC 代表松本毅、司会日本交通公社常務理事寺崎竜雄氏で「ガイドは観光振興の主役となる可能性がある」を主題に座談会を開催。プロのガイドとはどんな仕事なのか、ガイドツアーで伝えたいこと、経営者としての目線、地域への貢献と地域での連携、ガイド業のこれから、そしてコロナ禍で得た気づきをテーマに語っています。

屋久島でアカヒゲは繁殖しているのか?—8・9 月期の記録が語るもの— / 福留千穂・尾上和久・上田恵介 / Strix vol.38, pp.115-120, 2022

福留の野鳥論文デビュー作! 様々な観察記録から、屋久島のアカヒゲは、繁殖しているというよりは、渡りの通過個体が多い可能性が高いことを示しました。本文9ページ参照

平盛久 / 市川聡、屋久島通信 Vol.81, 屋久島環境文化財団

屋久島の春牧区には、平家の武将平盛久を祀った神社があります。2022 年秋には、佐渡から文弥芝居の一座を呼んで、人形浄瑠璃「盛久」を奉納する予定です。そのイベントに合わせて、屋久島通信に盛久にまつわるエピソードや盛久神社の由来について、まとめてみました。

## 編集後記

☆コロナ過という時代の大きな転換期、YNAC も転換期を迎えています。(ま)☆巣立ち雛の懸命な姿に励まされる日々です。(ち)☆特に社会派の韓国映画やドラマは骨太で面白い! 日本では題材がないからそのような作品をつくれないうかと思っていたけれど、これからはそんなことは言われませんか。(じ)☆今年は、盛久一色の夏です。佐渡に伝わる国の重要無形民俗文化財の文弥節を通して、盛久権現社の存在を多くの方に伝えたいです。(さ)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.39

発行日:2022 年 8 月 1 日

発行:(有)屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4311 鹿児島県熊毛郡屋久島町安房 2353-302

TEL 0997-46-3215 FAX 0997-46-3214

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/ynacyakushima>